



# 子どもも安全対策

向き合えばこわくない

子どもが犯罪に巻きこまれる事件が度重なる昨今、学校にも安全対策が求められています。子どもたちの安全を守るためには、どのようなことを心がけたらよいのでしょうか。

前向きに安全対策に取り組むことで、地域にネットワークが生まれ、子どもたちは明るくのびのびと生活できるようになる——危機管理アドバイザーの国崎信江さんは、そんなお話をしてくださいました。

イラスト | Yuzuko インタビュー | ミラウ・ミコフ

## 小学校での安全教育への取り組み

多くの小学校では、すでに「子どもの安全」についての様々な取り組みが行われています。小学校でよく行われている安全教育の例としては、子どもたちが地域に向いて、不審者が潜みやすいポイントなどを描きこむ「安全マップ作り」が挙げられます。時間によって人が少なくなる道、声が聞こえないガード下、暗いトンネル、見通しが悪く隠れやすい建物のすきま…、そうした危険エリアは、なるべくひとりでは通らないように促します。

学校の先生方だけで安全教育を進めようとする、大きな負担になってくるので、最初は外部のシンクタンクに学年ごとの「防犯教室」の授業をコーディネートしてもらうのもいいでしょう。

安全教育や防犯訓練は、子どもたちに窮屈な生活を強いるものではなく、むしろ身に付けて、安全を確保することで、あとは羽をのばして日々を過ごすための生活の基本です。子どもたちは、楽しみながら取り組んでくれるものですよ。

## 子ども自身の対応能力を向上させる

学校や保護者がどんなに安全対策に気を配っても、目の届く範囲には限界があります。

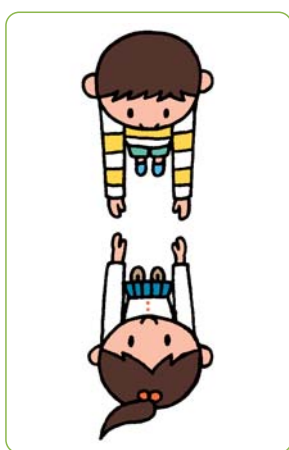
また、子どもたちに、「なるべくひとり

にならないように」「危険な場所に近付かないように」と言っても、そんな機会がまったくなくなることは期待できません。大勢で下校しても、自宅近くではひとりになってしまいうちも多いでしよう。そこで、子どもたち自身に危険を判断する能力、それを回避する対応能力を身に付けさせることが大切になってきます。それにはいくつかのポイントがあります。

### 1 人との距離を保つ

「悪い人」を見た目で見分けるのは大人でも難しいものです。犯罪者然としているとは限らず、むしろニコニコと「いい人」のふりをしながら近付いてくるかもしれません。子どもには、人と話すときは、互いに「前にならえ」をしたときよりも少し広い、「パーソナルスペース」を常に保つことを身に付けさせます。つまり、簡単につかまえられるしてしまうところまで人に近付かないようにするのです。よそよそしいように感じるかもしれませんが、実際にやってみるとそれほど不自然な距離ではありません。

### ● パーソナルスペース





## 国崎信江

くにざきのぶえ●神奈川県横浜市生まれ。危機管理教育研究所代表。危機管理アドバイザー。「子どものいのちを守る」研究を中心に防災・防犯対策を提唱。社会安全研究財団「子どもに対する被害防止教育に関する調査研究会」委員・社会技術研究開発センター「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域アドバイザーを務める。『教員向け不審者対策研修ハンドブック』（教育開発研究所）『犯罪から身を守る絵事典』（PHP研究所）DVD『犯罪・不審者から身を守ろう』（東京法規出版）他著書多数。



## 安全教育や防犯訓練は、安全を確保することで、 羽をのばして日々を過ごすための生活の基本です。



※GPS：人工衛星によって地球上の位置を正確に調べることができるシステム

す。あえて図書館などに放置して、親を安心させるといった手口も考えられるからです。

ただし、携帯電話や防犯ブザーなどの機器を持つことには、メリットもある反面、過信をしないことが大事です。これらは悪用の恐れもあって、例えばGPSの付いた携帯電話を子どもから奪い取り、あえて図書館などに放置して、親を安心させるといった手口も考えられるからです。

危険なエリアに、子どもがひとりで行かなければならないときには、「警戒モード」に入るように教えましょう。さっそうと歩きながら、時々後ろを振り返ります。携帯電話や防犯ブザーを手にして、すぐに助けを呼べる状態だと示すだけでも、不審者に対する抑止力になります。

### 3 危険な場所では「警戒モード」に

危険なエリアに、子どもがひとりで行かなければならないときには、「警戒モード」に入るように教えましょう。さっそうと歩きながら、時々後ろを振り返ります。携帯電話や防犯ブザーを手にして、すぐに助けを呼べる状態だと示すだけでも、不審者に対する抑止力になります。

### 2 逃げこみ場所を知っておく

地域のなかで不審者にあつたときの逃げこみ場所を、あらかじめ子どもに教えておきましょう。「子ども110番の家」、友人宅、店、消防署などの公共施設といった、人がいるところですね。

### 4 自分の「ねらわれやすさ」をチェック

子どもたち自身が、大人の提供する「チェックリスト」（7ページ参照）などを使って、不審者にねらわれやすい行動を取っていないかを自己診断するのは、判断能力を高める上で役立ちます。例えば人なつこい子どもや、大人びた服装をしている子どもは、ねらわれやすいと言えるでしょう。ただチェックをするだけではなく、必ずフォローの授業をして、どうして危険か、どんな対策ができるかを考えさせましょう。



### 5 日常的に防犯を意識させる

一日5分でもいいので、帰りの会などで「ワンポイント防犯対策」の時間を持つといいでしょう。「今日のような雨の日には、まわりの様子に気付きにくくなるから、気を付けましょう」といった注意点を、毎日ひとつ挙げるのです。防犯教室のような機会を、そのときだけのイベントで終わらせず、日常的に継続させてほしいですね。

## 学校がPTAと地域の 人たちの間をつなぐ役割を 担えるといいですね。

### 犯罪報道をクラスみんなで考える

子どもを対象とした犯罪が報道されたときには、子どもたちも不安や恐怖を感じてしまうものです。授業で取り上げて、同じような危険が降りかかった場合の対応などを話し合うといいでしょう。大人が答えを教えるのではなく、子どもたちに問いを投げかけて、納得できるまで解決策を探させることで、子どもたちの自信につなげていきます。

このとき、危険な情報について、過度な恐怖心を植え付けないように心がけましょう。特に1〜3年生くらいまでは、事件の悲惨な状況を事細かに伝えることは避けます。「ある女の子が、いつも一緒に学校から帰っているお友達が早退したので、たまたまひとりで帰っていたときに声をかけられて、二度とお父さんお母さんに会えなくなる事件に巻きこまれてしまいました。では、お友達が早退したときに、あなたならどうしますか？」といった表現で十分です。

4〜6年生になると、もう少し具体的な内容を話し合うことができるでしょう。子どもにテレビのニュースを見せるという方法もあります。ワイドショー的な番組ではなく、事実だけを淡々と伝えるニュースを選びましょう。

3・4年生というのは微妙な年齢なので、対応に気を付ける必要があります。自分が高学年に守られる立場なのか、低

学年を守る立場なのか、戸惑いやすいのです。この時期をしつかり区切って、3年生は1・2年生で習った基礎を復習する時期、4年生からは応用の時期と捉えるといいでしょう。

### 学校を地域ネットワークのセンターに

先生ひとりひとりが安全への取り組みを実践することも大切ですが、教職には異動もあるので、全体で足並みを揃えて進めるほうが、取り組みが継続していきます。安全な土壌をつくるには、上に立つ理事長や校長先生、教頭先生といった方々が、学校としての安全策の理念を示していくことがとても重要になります。

地域や学校には、それぞれ異なる事情があり、先生方のご意見も様々でしょう。まず教職員の間で、よくディスカッションをして、「うちの学校ではどうするか」という基本方針を統一しておきましょう。例えば家庭でも、お父さんとお母さんで意見が違えば、子どもが混乱してしまいます。教職員が全員で同じ研修を受けることも、意識レベルを同じにする上で役立つでしょう。

学校の方針がある程度決まったら、次は地域の人たちや保護者を交えて、三者会議の場を持ちましょう。学校を中心として、地域のネットワークができるのが、一番望ましいかたちなのです。地域のグループが自主的にパトロールなどをしようとしても、学校の協力がなければ、勝

手に子どもたちの送り迎えはできません。学校がPTAと地域の人たちの間をつなぐ役割を担えるといいですね。

地域にネットワークのシステムができれば、防犯だけでなく、防災や環境問題への取り組みなど、さまざまな地域活動に応用していくことができますよ。

### 大人不信にさせないために

不審者に対する心構えを教えることで、子どもたちが人間不信に陥ってしまわないか、心配になるかもしれません。子どもたちには、「世の中にはごく一部の悪い人もいるけれど、いい大人のほうがたくさんいる。ただ、いい人と悪い人を見分けるのが難しい」ということを伝えましょう。子どもたちを見守る大人の存在が実感できるように、パトロールや登下校時の見守りなどをしてくれる、地域のボランティア・グループの人たちと引き合わせたり、「子ども110番の家」を訪問したりするといいでしょう。



向き合えばこわくない

# 子どもの安全対策



**Q** 防犯ブザーや防犯笛の効果的な使い方を教えてください。

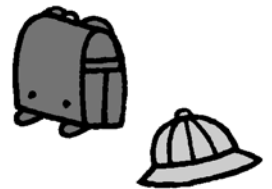
**A** 子どもに合わせた持ちやすい方法を、親子で話し合うといいでしょう。カバンに入れっぱなしだと、すぐに取り出せません。ポケットに入れてもいいですし、活発な子なら落としやすいので、ベルト通しなどにつないでおく方法もあります。紐を首にかけると、強く引っ張られたときに危険だという声もあります。引くと外れる仕組みになっている紐もあります。

ちなみに私は「笛派」です。電池も要りませんし、現代生活のなかで、私たちは意外とブザーの電子音には耳が慣れてしまっているものです。人の息による笛の音は、抑揚もあって、より異常を感じしやすいのです。

しかし、防犯ブザーや防犯笛を持っていくからといって、安心してしまうことは危険です。子どもたちが実際に不審者にあつたときには、音を鳴らすタイミングがわからないことがあるものです。相手は親切そうに振る舞いながら、距離を縮めてくるかもしれません。

私の場合は、「あなた（子ども）自身を今の居場所からどこかに移動させようという声が出たあつた時点で音を出さない」と教えています。

**Q** もしもの事件が発生したときの、子どもの「心のケア」について教えてください。

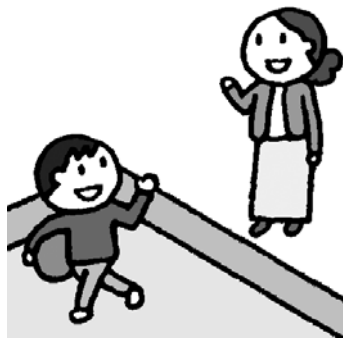


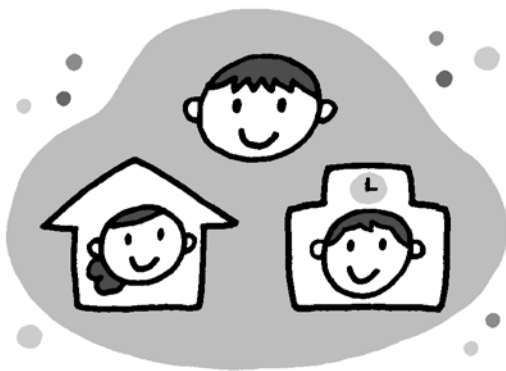
**A** 子どもが被害にあつていても、誰にも言えず、教師も把握できないことがあります。定期的に子どもと話し、何かの機会にさりげなく「何かあつたら、先生に手紙でもいいから教えてね」と伝えましょう。

実際に被害が確認されたら、まず大人が動揺しないことが肝心です。傷ついたり子どもの気持ちに寄り添い、むやみに過失を責めたり、質問攻めにしたりは避けません。子どもが興奮していたら、「○○されたの。つらかったね」と、子どもの言った言葉をゆつくりと繰り返してあげると落ち着きます。最後に、「他の子が被害にあわないように、警察に言おうか？」と子どもの意思を確認します。

警察に通報したら、事情聴取はなるべく子どもに直接ではなく、先生や保護者が間に入ってカウンセラーの役割をしましょう。警察も最近は、子どもの心のケアに関しては柔軟に対応してくれます。

防犯ブザーや防犯笛は、音を出すタイミングまで指導しましょう。





登下校、大丈夫？

## 安全レベルチェック

次のチェックリストをもとに、  
安全レベルを自己診断してみましょう。  
いくつチェックできますか？

(左ページは、子どもや保護者のチェック用にお使いください。)

### 先生編 ①

通学路の危険な場所を把握している。

地域パトロールの人たちと協力体制ができている。

登下校時は教職員が門に立って周囲の危険に注意をはらっている。

放課後でも問題なく非常時の対応ができる。

防犯ブザーや防犯笛の扱い方や、使うタイミングについて指導している。

保護者に学校が取り組んでいる安全対策の説明を十分にしている。

事件がおきたらクラスで話題にして対策を話し合っている。

日常的に防犯意識を高めるように心がけている。

安全対策について、教職員全員が情報交換や共通理解をしている。

PTSD\*などへの心のケアについて知識がある。

※PTSD…心に受けた衝撃的な傷が元で、後に生ずる様々なストレス障害のこと。

すべての項目にチェックがつくことを目標に、職員室、教室、保護者会、家庭などで、よりよい防犯対策について、話し合ってみてください。お互いが連携し合って、安心・安全な地域づくりを進めていけるといいですね。



安全レベルチェック 子ども編 ①

登下校の道に危険な場所がないか確認している。

人がいない場所や隠れやすい場所、助けを呼んでも来てくれない場所には近付かない。

「子ども110番の家」がある場所を知っていて、あいさつに行ったことがある。

ひとりでいるときには、近付いてくる車から離れ、警戒している。

遊びに行くとき、おうちの人に行き先や帰る時間を伝えている。

やさしそうな人に名前を呼ばれても、近付きすぎず、警戒する気持ちを忘れない。

親以外の人とは誰でも「パーソナルスペース」の距離を保っている。

知らない人に友達のことを聞かれても教えていない。

なるべくひとりにならないように意識している。ひとりのときはまわりに注意して足早に帰っている。

日頃から親や先生と安全について話している。

安全レベルチェック 保護者編 ①

曜日別の子どもの下校時間を知っている。

「子ども110番の家」がどこにあるのか知っていて、挨拶に行ったことがある。

子どもと一緒に帰る友達の名前、その友達と別れる地点を言える。

学校の安全対策についてすべて認知している。

事件がおきたら子どもと安全について話し合っている。

夫婦で安全対策について話し合ってから、子どもに伝えている。

子どもの洋服について不審者の目を気にする。

今までに子どもが怖い目にあったことがあるかどうかたずねたことがある。

子どもの持ち物の目立つところに記名していない。

危険な状況に遭遇したときの対処について、子どもに教えている。

向き合えばこわくない

# 子どもの安全対策

